

日時 平成二十六年十一月六日（木）

午後三時四十分開場 四時開演 五時頃終演予定

会場 千代田区立 内幸町ホール 地下一階

山室陽子 胡弓（藤植流四弦）

三曲演奏会

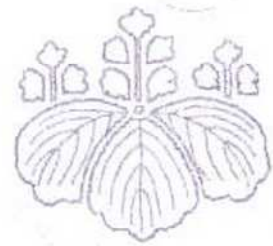
十世藤植流胡弓宗家
山田流箏曲三世山室家元

山室陽子

藤植流胡弓宗家・山田流箏曲山室家元
山室千代子の孫として1936年東京都
千代田区に生まれる。

数え年6歳の時、昭和16年6月6日
より山室千代子に師事し、胡弓・箏・
三絃の手ほどきを受ける。

昭和60年11月23日、
祖母「山室千代子追善演奏会」の時に
十世藤植流胡弓宗家・山田流箏曲三世
山室家元を継承し現在に至る。



十世藤植流胡弓宗家
山田流箏曲三世山室家元

ごあいさつ

風の音、雲のたたずまい、秋涼の候ととなってまいりました。
皆々様お健やかに過ごしのことと、お慶び申しあげます。

本日は、何かとご多用中のところ、貴重なお時間を割いて
お運びいただき、誠にありがたく、心より御礼申しあげます。

扱 胡弓というと、なじみが薄いと思われがちですが、本来
三曲とは胡弓、箏、三絃を指したものでした。

本日は、藤植流の四弦胡弓を中心にした胡弓本曲と創作曲、
箏曲を演奏いたします。

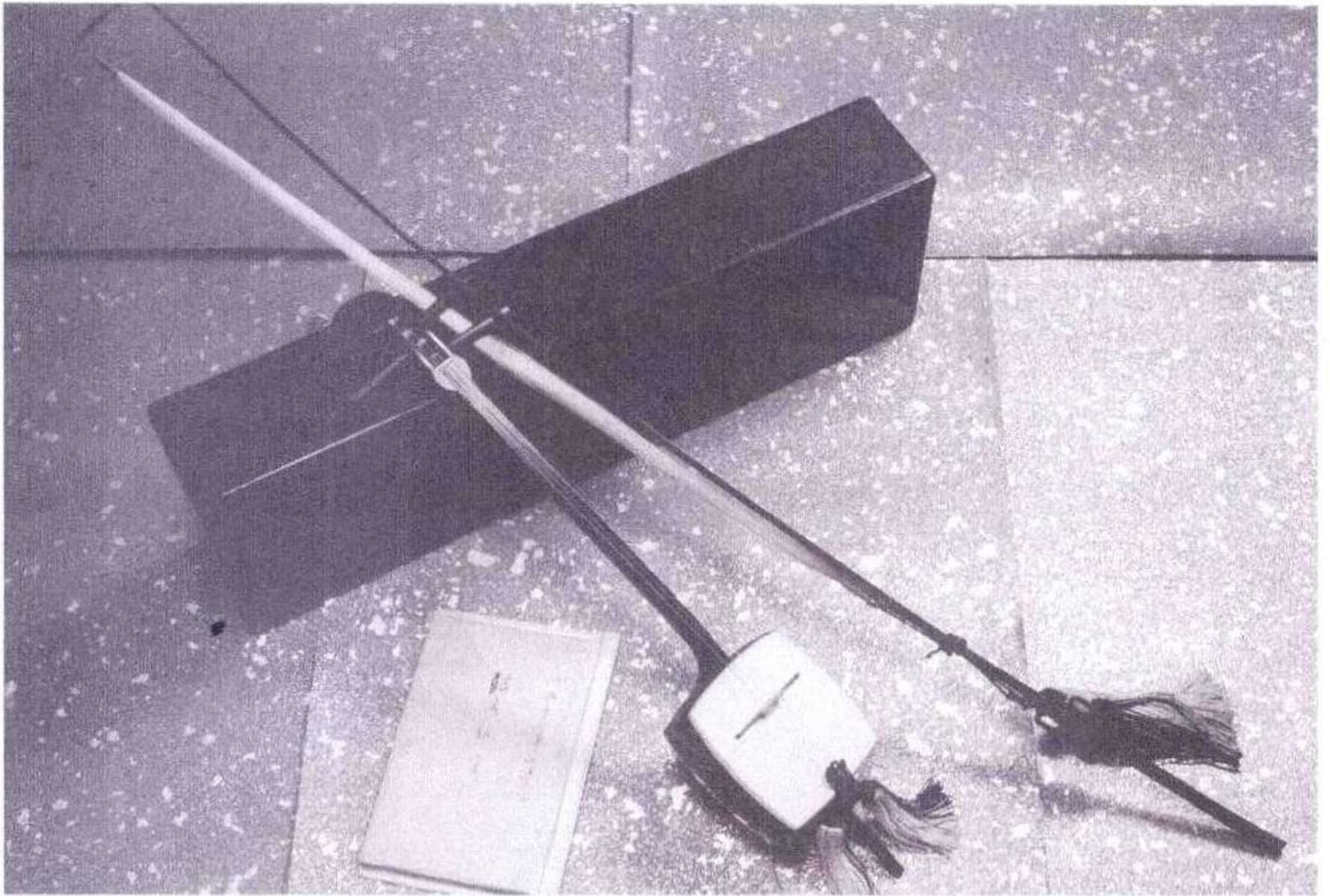
ひとときの間、音色に浸っていただければ仕合わせに存じ
ます。

洋楽・邦楽の世界で活躍の・二宮和子氏、亀山香能氏・始め
出演してくださる方々や、皆々様の御支援、お力添えて
今日を迎えることができました。

今後ともよろしくご指導、ご鞭撻のほど、お願い申し
あげます。

平成二六年十一月六日

山室陽子

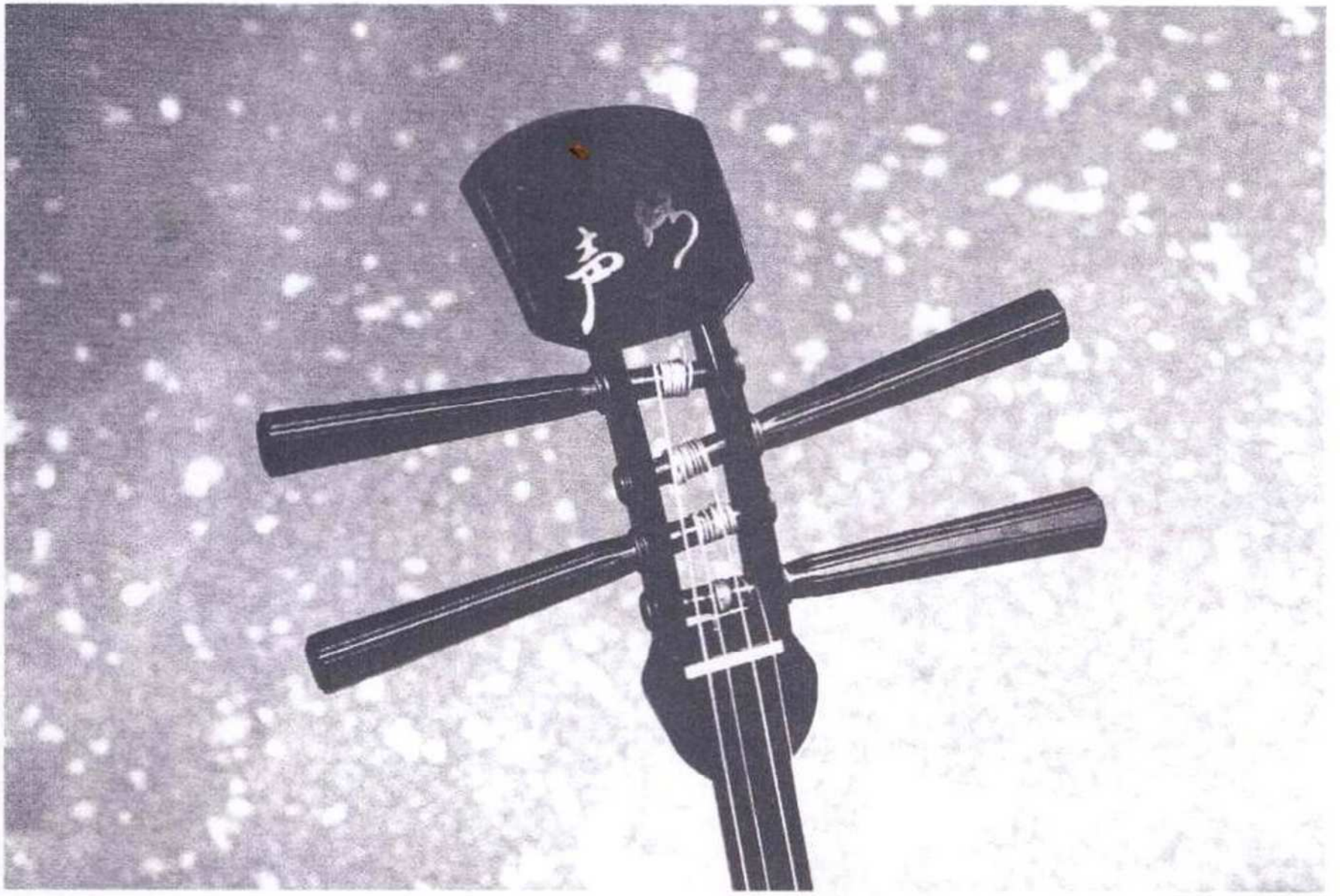


ふじえ

【藤植流・四弦胡弓】

1700年代 宝暦年間に藤植検校が江戸に現れ、楽器の改良を行って四弦胡弓を創始した。（広範囲に普及しているのは三弦胡弓）。これが藤植流四弦胡弓で弓の長いのも特色となっている。

馬文耕の（1757年）の著、「当世武野俗談」に藤植検校について「当時江戸麴町五丁目住宅、胡弓の名人なり」。（大百科事典（平凡社）昭和42年刊）には、詳しく説明あり。広辞苑にも藤植流胡弓についての記載がある。現代音楽大観には「現在山室家に保存されている胡弓には『もろ声』の文字が記されているが、これは藤植検校の妙技を賞で記した將軍家の直筆であると云われている名器である」と書かれており將軍家から拝領したもの。



山室保嘉

(一八三九〜一九〇七年)

翠景とも号し、明治期に
 箏曲家としても胡弓家とし
 ても活躍した。箏曲の作品に
 「伊達模様」と云う曲もある。
 特に箏曲の三世山勢松韻とは
 親交があり、明治二六年〜
 二九年の間に山室保嘉と山勢
 松韻らとの間で研究されて、
 胡弓本曲組曲「岡安砧」が
 三曲合奏曲に編曲され、山田流
 手事曲として親しまれている。



山室千代子

(一八七五〜一九五一年)

明治八年一二月二五日大蔵省
 統計権頭小島永貞の三女と
 して生まれる。幼少より音楽
 の天稟豊かにして四才で長唄
 一三才より箏曲修業、同年
 山田流大家山室保嘉に迎え
 られて養女となる。楽才たちま
 ちあらわれて一四才奥許免許。
 二〇才より皆伝免許。
 明治四〇年、養父保嘉病没後
 その後を継いで山室家芸風の
 発揚に努力した。
 特に今井慶松(一八七二〜一九四二年)
 と親交があった。今井及び三代
 荒木古童(一八七七〜一九三五年)と
 「移風会」を興し、当時その
 演奏会は話題になったと云われ
 ている。昭和初期時代しばしば
 皇居に招かれ皇后陛下の御前で
 演奏し、感謝状を拝受している。
 「静御前」と云う箏曲の作曲も
 ある。

演奏曲目

藤植流 本曲奥組

一、鶴の巣籠

胡弓 山室陽子

〔解題〕

藤植検校時代は、日本建築の座敷の演奏で弦は絹糸です。その哀調を帯びた音色の俣（今は、ホール・劇場と大きい）楽器と音を大きく改良せずに演奏いたします。

藤植流の本曲、奥組の「鶴の巣籠」は、鶴の鳴き声や、四本絃の3と4の糸は同音ですが、3の糸だけに指を軽く触れて弾く独特の奏法を口伝でゴロゴロやゴロチンと云う指使いがあります。

〔歌詞〕

御代あきらかに治まれる、君が千歳を舞ひ遊ぶ、ひな鶴の声おもしろき春の空（手事四段）。

緑色そう松風の、緑色そう松風の、調べのどけき庭の面。

藤植流 本曲奥組

二、岡 安 砧

胡弓 山室陽子

箏低音 龜山香能

箏高音 小林富美代

三絃 山本弘梅

〔解題〕

明治二六年〜二九年の間に、山室保嘉が、特に親交のあつた、箏曲の三世 山勢松韻らと研究されて「岡安砧」が三曲合奏曲に編曲され、山田流、奥手箏曲として親しまれています。

〔歌詞〕

月の前の砧は、夜さむさをつぐる、雲井の雁は琴柱にうつして面白や、夜半の砧のしぐれの雨と、夜わの砧のしぐれ雨とうちつれだちて、けふの遊びば。

山室陽子 作曲

三、巴 御 前

胡弓・平太鼓 山室陽子

箏低音 小林富美代

箏高音 龜山香能

三絃 山本弘梅

胡弓 オースチエンコ・ヴァチエスラフ

クラリネット 二宮和子

〔解題〕

富山県と石川県との間に在る俱利伽羅峠で、寿永二年（一一八三年）源義仲が「火牛の計」によつて、平維盛を破り、寿永三年正月二十日、宇治川の合戦で陸続と現れる東国勢の中を次々と駆け破りながら次第に勢いを失ひ主従五騎になつてしまつたが、巴は討たれなかつた。義仲に女であるから「いづちへも行け」と云われ「最後の戦をして、お見せ申し度い」と云つて武蔵の国の大刀の御田八郎師重の首をねじ切つて捨ててしまつた。その後、鎧、甲を脱ぎ捨て、涙ながらに、今、主の最後を見捨て、いづくをさして落ち行くべきやと嘆きながら、やがて東をさして行き方知らずになつた。

〔歌詞〕

くりから峠の戦は、木曾殿の勝ち戦、明けて寿永三年、正月二〇日宇治川の合戦。さんざんにかげなされ、主従五騎にぞなりにける。五騎がうちまで巴は、うたれざりけり、「女なれば、いづちえもゆけ我は討死にせんと思ふなり」木曾殿、宜ひけれども巴は「最後の戦して見せ奉らん」その後、物具ぬぎすてて、東の方え落ちぞ行く。

（平家物語 第九卷より）

昭和六十三年 作曲

出演者



箏
小林 富美代



箏
亀山 香能



クラリネット
二宮 和子



胡弓
オニスチェンコ・ヴァチェ斯拉ブ



三絃
山本 弘梅

—— 日 時 ——

平成26年11月6日（木曜日）

開場：午後3時40分 開演：午後4時

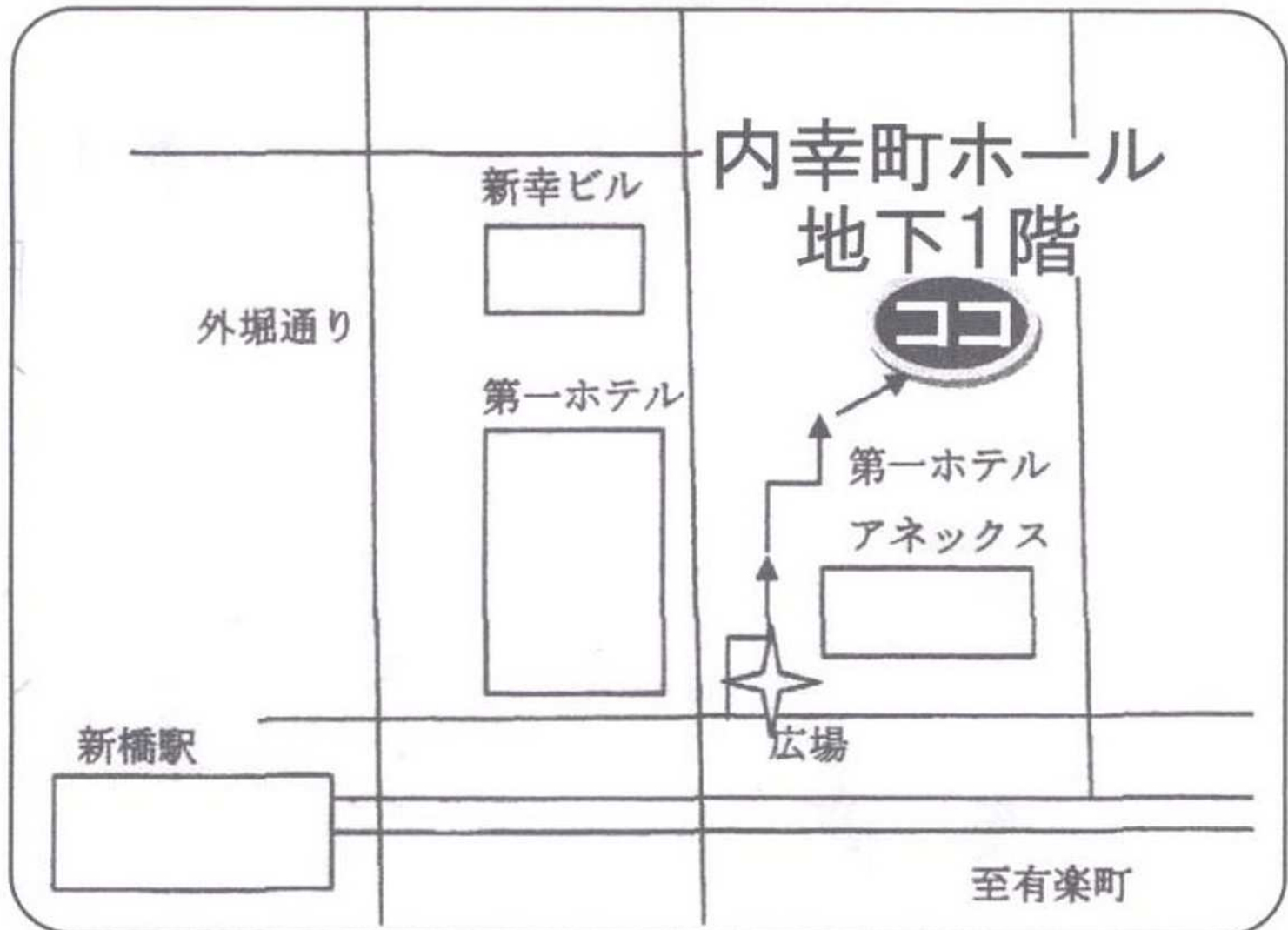
—— 会 場 ——

千代田区立内幸町ホール地下1階

TEL 03-3500-5578

—— 入 場 料 ——

3,000 円（全席自由）



都営三田線：内幸町 A5 番出口から徒歩 5 分

東京メトロ銀座線：新橋駅 7 番出口に向かい内幸町地下通路より徒歩 5 分

都営浅草線：新橋駅 7 番出口に向かい内幸町地下通路より徒歩 5 分

JR：新橋駅日比谷口より徒歩 5 分

お車：専用駐車場はありません。新幸橋ビル等周辺の有料駐車場をご利用ください。

